

私の身近な大きなもの

御坊市立御坊中学校 3 年
西川 優里

私は、物心を持ってから初めて「津波警報」に遭遇しました。私たちが暮らす御坊市には被害が無かったものの、災害にはどのように税が使われているのかに興味が湧きました。

令和 7 年 7 月 30 日、カムチャツカ半島沖でマグニチュード 8.7 の大きな地震があり、午前 9 時 40 分に私の住む和歌山県沿岸で最大 3 m が予想される津波警報が発表されました。その時私は、夏の吹奏楽コンクールに向けてのクラブ活動をしていました。私の住む地域では地震はなかったため、気にしていなかったのですが、突然スマートフォンから音声が始まり、津波警報を表示する画面になりました。近くにいた先生や友人とともにすぐ机の下に隠れ、突然の事にとっても焦りました。私の家は日高川に近い場所にあるため、家族がどうしているのか心配になりました。父に電話をすると、「今、菌津波避難タワーにいる」と言いました。父は町内会長を務めており、津波警報が出たあと、一人暮らしのお年寄りの方に呼びかけて、避難タワーへ一緒に避難をしていました。今回、活用された避難タワーは誰が建てたのかなどが気になって父に話を聞いたり、インターネットで調べたりしたところ、それらの多くが税で賄われている事を知りました。また、ニュースで見た被害があった場所に自衛隊や警察、消防を派遣するための費用も税で賄われている事が分かりました。菌津波避難タワーが建てられた経緯を父に聞くと、私が 4 歳である 2014 年に御坊市で最初に出来た避難タワーだとの事です。出来たきっかけは、2011 年に起きた東日本大震災の津波だと聞きました。今後、南海トラフ地震が起こると御坊市へ最大 17m もの津波が押し寄せて来ると予想されています。御坊市は、津波対策のために約一億五千万円の予算を立てて、津波が来る地域を“なんとかしなければいけない”と言う想いと“一人も犠牲者を出さない”と言う想いで、御坊市で最初の避難タワーを建設したとのことです。その後、御坊市には菌地区、新町地区、名屋地区の 3 か所に避難タワーが建設され、地域の人々に安心を与える役割を果たしています。

御坊市の災害対策について調べていると、最も重い“人の命”と“多額の税”が深く関わっている事に気づきました。私自身も、今回の事を通して、税がどのように使われている事が適切なのかを考え続けたいと思いました。そして、「稲むらの火」の逸話で村人に避難を呼びかけ、地域の人々を災害から守るために広村堤防を建てた濱口梧陵さんのように、私たちの地域の安全のために私たちの税で避難タワーが建設された事に感謝の思いを持ち、南海トラフ地震が起きたときには、梧陵さんや父のように私自身と地域の人々の安全のための行動ができるようになりたいと思います。